ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

海外に渡った日本人の足跡

憲政資料室所蔵 日系移民関係資料のご紹介

世界図書館紀行 ライデン大学図書館特別コレクション室

2012.9
No.618

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00　資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00　後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

9 September

CONTENTS

02 世界第一チャリ子（ネ）大曲馬廻り寿語六（すごろく）
蘆原英了コレクションのサーカス関係資料から
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 世界図書館紀行　ライデン大学図書館特別コレクション室

15 海外に渡った日本人の足跡　憲政資料室所蔵 日系移民関係資料のご紹介

24 「私たちの使命・目標2012－2016」を策定しました。

14 館内スコープ
世界の日本関係資料を集めています

23 本屋にない本
○『中野を語る建物たち　中野区大正期・昭和前期建造物調査報告書』

26 NDL NEWS
○新副館長就任
○第2回科学技術情報整備審議会

27 お知らせ
○『活動実績評価に見る平成23年度の国立国会図書館』を刊行しました
○国立国会図書館関西館開館10周年記念 国際シンポジウム「図書館サービスとe戦略」のご案内
○国立国会図書館関西館開館10周年記念展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」のご案内
○子どものための音楽会「宮沢賢治と音楽―『日本の子どもの文学』展によせて―」
○『国際子ども図書館調査研究シリーズ』No.2を刊行しました
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

今月の一冊 September

国立国会図書館の蔵書から

世界第一チャリ子大曲馬廻り寿語六

蘆原英了コレクションのサーカス関係資料から

邊見　由起子

「チャリ子」は、明治19（1886）年に来日したイタリアの曲馬団名Chiariniのことで、本来は「キアリーニ」だが、英語風に発音したのか、日本ではチャリネと呼ばれた。その興行は大評判で、サーカスのことをチャリネとも称するほどとなった。もっとも、サーカスという言葉が広まったのは、昭和8（1933）年来日のドイツのハーゲンベック・サーカス以降のことで、それまでは曲馬と呼ばれていた。

チャリネ以前にも、元治元（1864）年アメリカのリズリー、明治4（1871）年フランスのスリエなどの西洋曲馬が来日したが、チャリネ一座の人気、知名度は爆発的で、11月1日には吹上御苑で天覧も得ている。横浜や東京だけでなく、関西、長崎などを巡業し、明治22（1889）年に再来日した。

世に珍しいものあればただちに錦絵が発行された当時、西洋曲馬の錦絵も数多く出版された。人文総合情報室所管の蘆原コレクション[注]には、リズリー、スリエ、チャリネのほか、明治22（1889）年のウヲジアー、明治25（1892）年のアームストンなどの西洋曲馬を描いた錦絵が約30点収蔵されている。ここに紹介するすごろく（写真1）もそのひとつである。

5枚の紙を接いだ大判の廻りすごろくで、当時の錦絵の特色である鮮やかな赤と紫が印象的である。画家は、明治期の風俗画で知られる楊洲周延（1838-1912）。四隅に観客や楽隊を配し、すごろく盤面の円形を曲馬の舞台に見立て、馬が疾走する様子や、出し物が次から次へと繰り出される様子が巧みに表現されている。

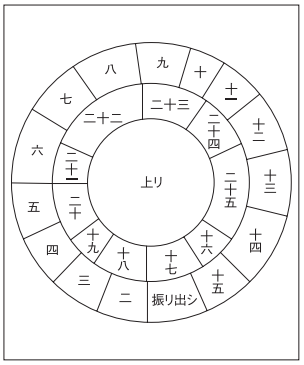
マス目をよく見ると、虎や獅子、大蛇や象など、動物が多いことに気づくだろう。チャリネは曲馬のほかに、獣苑（動物園）を開設していた。当時の上野動物園には、まだほとんど外国産の動物がいなかったし、玉乗りなどの軽業や馬の曲芸が主だったそれまでの西洋曲馬と違い、猛獣の芸や珍しい動物は呼び物であったようである。

当時の新聞に照らして、演者や内容を見てみよう。1回のプログラムは15演目程度であったが、毎週のように演目を入れ替え、「新狂言興業」と広告を出し、集客を図っていた。セイロンの象を指揮するのは仏人アバデ氏（2-3マス）。疾走する馬上から槍や鉄砲で標的をとらえる曲芸（4-6マス）は4週目からの新演目。南北戦争で負傷したハーパー兄弟の軽業（7マス）。檻の中で猛獣を巧みに操るのは米人フレム氏、赤い閃光は癇癪玉がはじける様子である（8、14マス）。ストドリー兄妹は息のあった曲馬を披露し（11マス）、隠した手拭いを探し出してチンチン踊りをする黒馬（12マス）や猿の曲馬が笑いを誘う（15マス）。四疋の裸馬を乗りこなすのは少女ロランだろうか（22マス）。道化のゴットフレ氏は人気者であった（23マス）。中央のチャリネ氏が指揮する団体馬術（上り）は、実際はフィナーレではないが一座を象徴する演目であり、中心に配置したのであろう。

見世物には慣れていた日本人だが、西洋曲馬のスピード感やきらびやかさには圧倒されたようである。幕末明治期の漢学者、信夫恕軒（1835-1910）は「…駿足飛ぶが如し。当に是れ落花風に舞ひ蝴蝶花に戯るべし。…観る者覚えず喝采す。…観る者眼眩みて臀痒し。」と書いている（『恕軒文鈔』所収「観洋人戯馬記」）。

（へんみ　ゆきこ　利用者サービス部人文課）

写真１　7月14日横浜に来日。9月1日から10月30日まで神田秋葉原で大々的に興行を行った。続けて築地、浅草、靖国神社、横浜で興行し、神戸へ発った。



振リ出シ	馬体操
二	象ノ芸
三	象ノ踊リ
四	鎗ニテ首ヲツク
五	鉄炮ニテ首ヲ打
六	鎗ニテカンヲツク
七	一本足ノ軽業
八	虎ノ輪クゞリ
九	輪クゞリ曲馬
十	三人軽ワザ
十一	男女軽業
十二	馬ノ踊リ
十三	馬ノ芸
十四	師々［獅々ヵ］ノ芸
十五	猿ノ曲馬（是ヨリ登ル）
十六	子供茶番
十七	馬上早替リ
十八	馬上輪クゞリ
十九	大鳥
二十	赤鬼曲馬
二十一	大蛇
二十二	四足曲馬
二十三	道化
二十四	三人軽業
二十五	引コミ（一ヲ振バ上ル）
上リ	

写真２

写真１　『世界第一チャリ子大曲馬廻り寿語六』楊洲周延画　横山良八　明治19年11月　70×60cm　＜請求記号　VA301-29＞

写真２　『世界第一チャリ子大曲馬廻り寿語六袋』楊洲周延画　松根屋　明治19年11月　25×21cm　＜請求記号　VA301-30＞

＊国立国会図書館デジタル化資料でカラー画像をご覧になれます。

参考文献

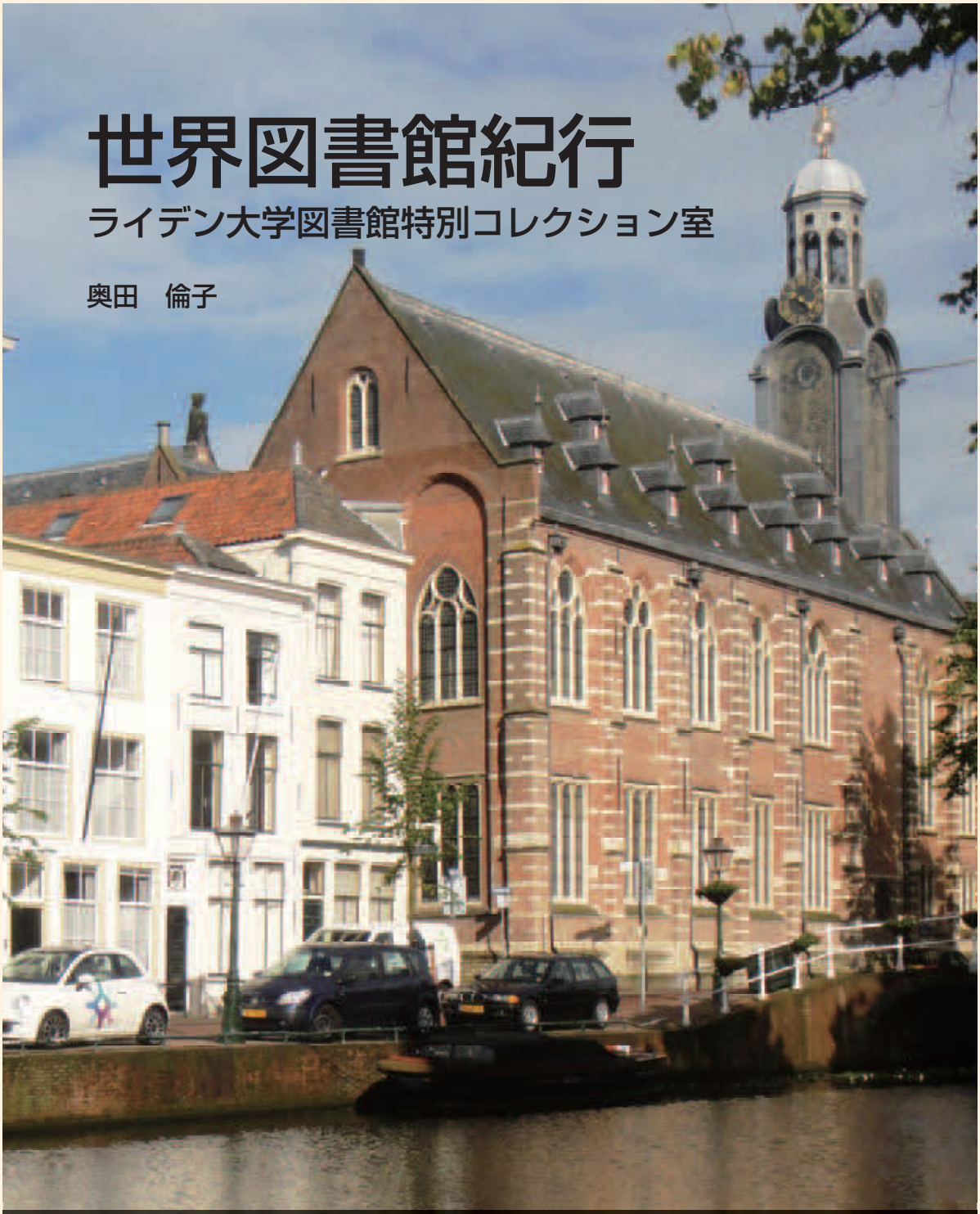
- 『明治の演芸』　倉田喜弘編　国立劇場調査養成部芸能調査室　1980-1987　＜請求記号 KD815-34＞
- 『馬のサーカス・大曲馬　企画展』　馬事文化財団馬の博物館編　馬事文化財団　2009　＜請求記号 KD851-J6＞
- 『幕末明治の浮世絵集成』樋口弘編著　味灯書屋　1955　＜請求記号 721.8-H448b＞

注　バレエや音楽の研究家、評論家として知られた蘆原英了（1907-81：本名 敏信）氏が収集したバレエ、シャンソン、演劇、サーカス等に関する特別コレクション。

世界図書館紀行

ライデン大学図書館特別コレクション室

奥田　倫子



筆者は、2009年8月から2011年8月までオランダのライデン大学大学院に留学し、ライデン大学の初代日本学教授ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン（Johann Joseph Hoffmann, 1805-1878）旧蔵日本資料の特定を試みた。民族学・言語学等についての欧文書籍、中国書籍、日本書籍からなる彼の蔵書は、没後「非常に貴重なコレクション」と評価され、ライデン大学図書館が購入したが、日本書籍については、購入時の目録が失われたため、現在ライデン大学図書館が所蔵する日本資料のうち、一体どのタイトルがホフマンに由来するものか分からなくなっていた。本稿ではライデンに所在する日本古典籍の系譜を概観しつつ、今回明らかになったホフマン旧蔵書の一部をご紹介したい。

（写真① 運河沿いに立つライデン大学アカデミーヘボウ（16世紀校舎）　右側のレンガ造りの建物　撮影者：有田千枝）

学府ライデン

オランダ南ホラント州ライデン市にあるライデン大学は、オランダがスペインの支配から解放されて間もない1575年に設立されたオランダ最古の大学である。スペイン軍による包囲から町を守り抜いた市民に、独立戦争の指導者オラニエ公ウィレムは、その功を讃える証として、1年間の免税と大学のどちらが欲しいかと尋ねた。市民の選択は大学だった。近隣の西欧諸国で絶対君主による統制が強まる中、ライデンは、宗教・思想・学問の「自由の砦」として、ヨーロッパ中から進歩的な学者を惹きつけた。印刷出版業も盛んであり、ライデンで生まれた新しい思想や知識は印刷されてヨーロッパ各地へ広がった。当地で活躍した学者の蔵書や彼らが遺した文書が、ライデン大学図書館の特別コレクション室で保管されている。16世紀から20世紀に至るオランダの学問の貴重な足跡である。5世紀のギリシャ語旧約聖書、8世紀のコーランの断片、カロリング朝期の絵巻、中世末期にオランダで起こった市民による精神的共同生活の中で作成されたキリスト教写本、ヨーロッパ各地で集められた初期刊本、竹に刻まれたインドネシアの行政文書など、多様な文化圏の多様な形態の資料が、16世紀以来の受入記録や目録とともに、大学図書館特別コレクション室の二層構造の書庫に整然と並んでいる。

ライデンはまた、日本とも縁の深い町である。19世紀前半に長崎・出島の商館員によって収集された日本の文物の多くがここにある。中でも書籍は、オランダ最古の大学を擁し、研究・出版環境の整った学府ライデンであればこそ集積した。その中には、1823年から1829年にかけて日本に滞在したシーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）の収集書籍のように、早くから日本でもよく知られ、多くの日本人研究者を惹きつけてきたものもあれば、ライデンの歴史にとっては同様に重要でありながら、今日に至るまで、日本ではその存在がほとんど知られてこなかったものもある。

在ライデン日本古典籍の系譜

ライデンに初めてまとまった量の日本の書籍がもたらされたのは1832年である。1823年から7年間出島に滞在したシーボルトが持ち帰った民族学資料の中に含まれていた。シーボルトの収集品は、出島商館長ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff, 1779-1853）や一等書記官フィッセル（Johan Gerard Frederik van Overmeer Fisscher, 1800-1848）の収集品と同じく、1815年に設置された王室宝蔵庫（Koninklijk Kabinet van Zeldzaamheden）に買い上げられた。ブロムホフやフィッセルの収集品が王都ハーグの王室宝蔵庫の施設に収蔵・展示されたのとは異なり、シーボルトの収集品はライデンのシーボルトの自宅で保管され、展示の傍ら彼の研究や出版活動に利用された。しかし、1859年にシーボルトの2回目の日本渡航に際して当時のライデン国立考古学博物館長レーマン（Conradus Leemans, 1809-1893）が管理を暫定的に引き継ぐと、シーボルト収集資料はライデン市街のメインストリートに面した、より資料の保管に適した物件へ移された。シーボルト宅の保管環境は、資料にとって望ましいものではなかったからである。また、1862年には、レーマンの判断により、ハーグの王室宝蔵庫が所蔵する日本・中国コレクションが、ライデンのシーボルト収集資料と統合され、ライデンに移された。こうして、19世紀前半に出島の商館員によって集められた三つのコレクションすべてが、1860

写真②
ライデン大学図書館

年代にはライデン国立民族学博物館に収蔵されることになったのである。

この状態は、レーマンが考古学博物館長と民族学博物館長を兼ねていた1880年までの約20年間続いたが、その間も、開国前後の日本に滞在したオランダ人から、続々と新たな資料が届けられた。まず、1860年に、最後の出島商館長であり最初の駐日オランダ領事となったドンケル・クルティウス（Jan Hendrik Donker Curtius, 1813-1879）の収集書籍がライデンに到着し、民族学博物館に収蔵された。医師のハラタマ（Koenraad Wolter Gratama, 1831-1888）は長期にわたって日本に滞在し、様々な分野の書籍を大量に持ち帰り、その多くを、民族学博物館が購入した。医師のヘールツ（Antonie Johannes Cornelis Geerts, 1843-1883）は、日本で生涯を閉じたが、植物学関係の書籍一式をライデン大学付属植物標本館に寄贈した。

1878年に初代日本学教授のホフマンが没すると、彼の蔵書の獲得をめぐってライデン大学図書館と民族学博物館との間ですれ違いが生じた。そのすれ違いは、当時、大学図書館が直面していたより根本的な問題に関係していた。それは、出版点数の増加と学問分野の細分化が進みつつあった当時のヨーロッパにおいて、図書館資料がより多くの人々に利用され、公共財としての価値を十分に発揮するためには、総合図書館と分野別の博物館図書室とのどちらに所蔵されるのが望ましいかという問題であった。当時のライデン大学図書館長プライヘルス（Willem George Pluygers, 1812–1880）は、大学の中央図書館に資料を集め、目録を充実させることで、利用を拡大できるという考えの持ち主であった[1]。ホフマンのもとで中国語を学び、その後継者としてライデン大学の中国学教授になったシュレーヘル（Gustaaf Schlegel, 1840-1903）は、欧文書籍、中国書籍、日本書籍からなるホフマン旧蔵書全体を買上げるよう大学図書館に働きかけた。しかし、買取り価格も概ね

写真③
ライデン国立民族学博物館

決定した時期になって、民族学博物館のレーマンが、ホフマン旧蔵の日本書籍を民族学博物館に受け入れたいと内務大臣に申し出た。当時の内務大臣コッペロ（Johannes Kappeyne van de Coppello, 1822-1895）は、レーマンに所蔵を希望する日本書籍の目録を作成するように命じ、レーマンはホフマンのもとで日本語を学び、民族学博物館の学芸員となっていたセルリエ（Lindor Serrurier, 1846-1901）にその仕事を依頼した。セルリエは、シーボルトやフィッセル等のコレクションに含まれている資料との重複も考慮しつつ、民族学博物館に収蔵したいタイトルと、博物館では必要のないタイトルに分けて目録を作成した。しかし、大学図書館長プライヘルスはホフマンのコレクションが二つの機関に分割されることを好まず、また特殊言語資料として民族学博物館に所蔵されることも好まなかったため、内務大臣の提案に反対し、最終的には法律の規定を根拠に大学図書館がホフマンの蔵書のすべてを受け入れることになった。ホフマン旧蔵書が大学図書館に着いたのは、1878年10月7日である。

セルリエはその後、レーマンの後を引継いで民族学博物館の館長になった。セルリエの在任中に、これまで民族学博物館に所蔵されていた日本・中国書籍についても、読解力を必要とし、大学における専門家の育成と研究活動を前提として有用性が認められる研究用文献と博物館における一般市民を対象とした展示に適した視覚的魅力のある書籍にグループ分けされた。1881年に、民族学博物館の日本・中国書籍のうち、民族学博物館での展示に向かないものや複本は大学図書館へ移された。蘭学書や西洋兵法の翻訳書等を中心とするドンケル・クルティウスの収集書籍の大部分およびブロムホフ、フィッセル、シーボルトの収集書籍の多くも大学図書館に移された。

こうして、ライデンには19世紀末までに民族

1 Ch. Berkvens-Stevelinck, *A History of Leiden University Library 1575-2005*（Leiden : Primavera Pers, 2004） pp.60-63.

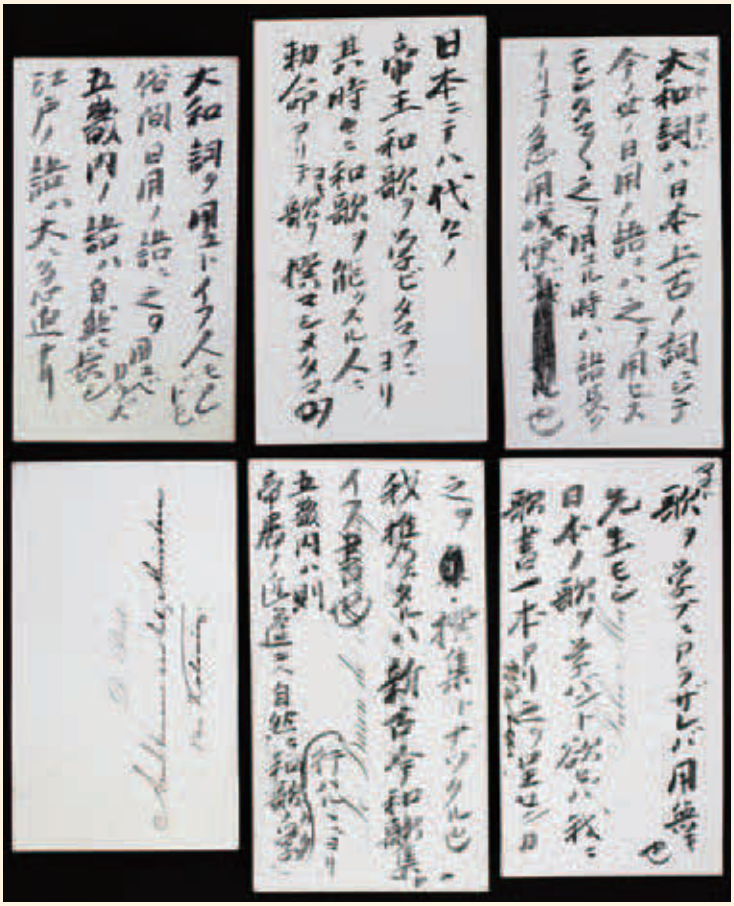
学博物館と大学図書館という相互に関連した、しかし互いに性質の異なる二つのコレクションが形成された。ブロムホフやフィッセル、シーボルトの滞在した19世紀前半の日本を知るのに適した保存状態のよい資料は民族学博物館に多く残っている。一方、大学図書館の資料は、幕末の西洋技術の摂取、西洋的近代化などに対するオランダの政治的関心から集められたドンケル・クルティウス・コレクションと、日本語についての言語学的関心と政府翻訳官としての必要性から収集されたホフマン・コレクションを柱としており、19世紀オランダ史の一断面を知る上で興味深い。コレクション分割以後、民族学博物館、大学図書館は、それぞれに蔵書構築を行っていく。ちょうど、1870年代中頃から、日本滞在のヨーロッパ人による書籍の収集も、日本からヨーロッパへの輸送も容易になり、オランダ国内のみならず、フランスやドイツの書店によっても日本の書籍が扱われるようになっていた。

ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン

このように、日本書籍が1830年から1880年にかけて続々とライデンに持ち込まれたのは、ライデンには日本語文献を十分に読むことのできる人物がいたからである。彼の名をヨハン・ヨーゼフ・ホフマンという。シーボルトと同じビュルツブルグ出身のドイツ人で、1830年にアントワープでシーボルトに出会い、助手としてライデンにやってきた。当時のヨーロッパでは、一部の中国学者が日本語にも取り組むようになり、1825年にパリの東洋学者レミュザ（Jean-Pierre Abel-Rémusat, 1788-1832）とランドレス（Ernest Augustin Xavier Clerc de Landresse, 1800-1862）によって、イエズス会宣教師ロドリゲス（João Rodrigues, 1558?-1633）が17世紀初頭に完成した*Arte breve da Lingoa Iapoa*（『日本語小文典』）のフランス語訳*Élémens de la Grammaire Japonaise*が刊行されたばかりであった。ホフマンは、これを手がかりにしつつ、シーボルトがジャワから連れ帰った中国人学者郭成章の力を借りて、中国語を通して日本語を学んだと言われる。そうして日本語文献がほとんど読めなかったシーボルトに代わってライデンに所在する書籍群から情報を拾い集め、翻訳してシーボルトの出版活動を助けたが、シーボルトがライデンを不在にすることが多くなるにつれて、次第に二人の関係は悪化していったと伝えられる。

写真④
ヨハン・ヨーゼフ・ホフマンの肖像

一方、確かな日本語能力によって諸方から信頼を得て、オランダ国内におけるホフマンの地位は次第に高まっていく。1846年に、将軍徳川家慶からオランダ国王ウィレム2世へ宛てた書状を翻訳したことをきっかけに、ホフマンは中国語・日本語の政府翻訳官に任命され、幕末の日蘭外交に関わるようになる。そして1855年に世界で最初の日本学講座がライデン大学に設置されると初代教授に就任し、翻訳官の仕事の傍ら、中国語、日本語を学生に教えた。1857年にドンケル・クルティウスが長崎から送った原稿に大幅な追記をして*Proeve eener Japansche Spraakkunst*（『日本語文典例証』）を完成させる。開国直後の開港地で重宝され、1861年にはフランス語訳も現れた。1862年に文久遣欧使節[2]がオランダを訪れた際には、政府翻訳官として晩餐会に同席し、その場で



左 写真⑤ 文久遣欧使節団との晩餐会で使用されたネームカード。「大和詞」についての回答が記入されている。

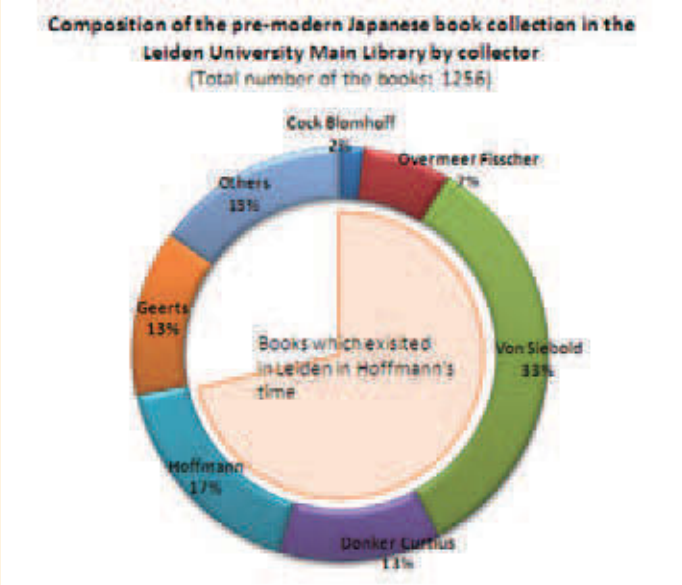
上 写真⑥ 文久遣欧使節団のライデン訪問に際し作成されたウェルカムカード。ホフマン自筆と推定される。

ホフマンは使節の何者かに、筆談で「大和詞（やまとことば）」について質問したようだ。ユトレヒト大学図書館に残るホフマン関係文書の中には、晩餐会のネームカードの裏に、「大和詞ハ日本上古ノ詞ニシテ今ノ世ノ日用ノ語ニハ之ヲ用ヒズ…」（写真⑤）という説明が筆で書き込まれている。いったい使節団のうちの誰がこのような回答をしたのか、興味を惹かれるところである。1862年から1865年には、ライデンに留学した津田真道、西周ら一行の世話役を勤める傍ら、日本語の音声や用法について彼らから情報を得ている。30年以上に及ぶ日本語の学習と研究の成果は、*Japansche Spraakleer*（『日本語文典』）として1867年にオランダ語で出版され、同年中に英語版も刊行された。1876年には英語版の第2版が、1877年にはドイツ語版も刊行され、さらに1878年には続編の*Japanische Studien*（『日本語研究』）がドイツ語で刊行された。

ホフマンの活躍は多角的で、日本の磁器や養蚕業など貿易や産業に役立つ論文も多く残した。そのため、同時代のヨーロッパの日本研究者のみならず、養蚕家や農学者等とも交流があり、「ネットワークの人」と呼ばれることもある。

19世紀末に研究用文献として大学図書館に収蔵された日本書籍は、言わばホフマンがその研究活動や情報収集に用いた文献である。その証拠に多くの資料にホフマンによる書込みが見られる。ホフマン自身の蔵書のほか、シーボルト、フィッセル収集書籍の中でホフマンが最も頻繁に使用した『和漢三才圖會』（正徳5［1715］年跋）や『日本書紀』（寛政10［1798］年刊）も現在大学図書館の所蔵になっている。

2 江戸幕府が文久元（1862）年に開港開市延期交渉、西洋事情の視察、ロシアとの樺太境界の確定を目的として英国・フランス・オランダ・プロシア・ポルトガル・ロシアに派遣した竹内下野守（保徳）正使以下38名から成る外交使節団。http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_uk/02.html



（図1）ライデン大学図書館特別コレクション室所蔵日本資料コレクター別内訳
（筆者調べ）

写真⑦ 蒔園宇成之述『四書國字辨』皇都 弘簡堂須磨勘兵衛
寛政6（1794）年序 10冊 ＜請求記号Ser.612＞

ホフマン旧蔵書

さて、ここからは大学図書館特別コレクション室に所蔵されるホフマン旧蔵書を見ていこう。図1にあるとおり、ホフマン由来の資料は特別コレクション室所蔵日本古典籍のうち、2番目に大きい集合であり、215タイトルに及ぶと推測される。だが、ホフマンの蔵書が大学図書館に購入される際にセルリエが作成した目録は失われ、ホフマンの日本書籍は時間と共に忘れられた。しかし、ホフマンが*Japansche Spraakleer*の中で多く引用した『倭訓栞（わくんのしおり）』などがシーボルトやフィッセルの収集書籍に入っていないことは幸田成友や杉本つとむが既に指摘しており[3]、また教授就任後の1855年にホフマンがライデン大学に中国・日本書籍の購入を提案した際の王立科学アカデミーの回答からは、既にこの頃までにホフマンが個人蔵書を有していたことがうかがい知れるのである[4]。

今回、ライデン大学図書館特別コレクション室の所蔵する日本古典籍の悉皆調査を行う機会に恵まれ、蔵書印や手書きで振られた番号等の情報と大学図書館に残る古い目録に残されたメモ等を突き合わせ、ホフマン旧蔵書の特定を試みた。調査方法の詳細や全タイトルの目録は紙面の都合から別の機会に譲ることとし、ここではいくつかの資料を紹介したい。ホフマンの旧蔵書は、遺品として整理された際に、書架に並んでいた順に番号が振られたという記録が、大学図書館アーカイブズに残っている。現在、その番号順に資料を並べ直すと、書架には、およそ次のような順序で並んでいたことがわかる。

1. 四書
2. 神話
3. 心学書
4. 植物書・園芸書
5. 辞書・事典類
6. 往来物
7. 文学
8. 地図
9. その他

3 幸田成友「ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン」『南と北：史話』（東京：慶応出版社，1948）pp.115-134.
杉本つとむ『西洋人の日本語発見：外国人の日本語研究史』（東京：講談社，2008）

4 'Verslag en Voorstel van de Heeren T. Roorda, A Butgers en C. Leemans, omtrent het voorstel van den heer J.Hoffmann tot bevordering vab de beoefening der Chinesche en Japanshe Taal- en Letterkunde', *Verslagen en Mededelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen. Afdeeling Letterkunde.* Eerste deel, 1856, 49.

左 写真⑧ 太安萬侶［著］本居宣長［編］長瀬真幸校『古訓古事記』下巻 京都 河南儀兵衛［ほか2名］ 享和3（1803）年 改装1冊 ＜請求記号Ser.419＞

上 写真⑨ ホフマン旧蔵の辞書類（一部）

四書は、ホフマンが日本語に取り組み始めた初期から、よく読まれたテキストであったらしい。当初、フィッセルが持ち帰った後藤点[5]の『四書』（文化9（1812）年刊）[6]に沿ってドイツ語訳を作っていたようだが、開国以後、ホフマン自身、レベルの異なる3つの四書テキストを入手している。佐藤一斎点『四書集註』（安政2（1857）年刊）[7]、蒋園宇成之述『四書國字辨』（寛政6（1794）年序）（写真⑦）、そして渓百年の『経典餘師（けいてんよし）』のシリーズである。このうち、『四書國字辨』には、ホフマンがフィッセル収集の『四書』を元に作ったドイツ語訳の草稿が挿し込まれている。同じ後藤点で読み下しており、比較しやすかったのであろうか。表紙には「＄5＝fl.15」と鉛筆で書かれており、開港直後の開港地で取引された品物のように思われる。

日本の神話に関する資料としては、『日本書紀』[8]と『古訓古事記』（写真⑧）を所蔵していた。『日本書紀』は、洋装本に改装されているが、表紙が残っており、題簽に「神代巻」（角書は「校正大字」）とある。刊記はない。一丁表の右肩に“L. de Vogel”と押印があり、1860年前後に長崎のオランダ領事館に勤務したフォーヘル（Lois Cornelis Jan Albert de Vogel）の協力によるものと考えられる。『古訓古事記』も改装されている。これは、津田真道から贈られたもので、津田家の手による書入れがある。

最も数が多いのは辞書・事典類で30点以上に及ぶ（写真⑨）。毛利貞斎編『増續大廣益會玉篇大全』（安永9（1780）年刊）[9]、『大全早引節用集（たいぜんはやびきせつようしゅう）』（万延1（1860）年刊）[10]など、江戸期に版を重ねた辞書類を揃えている。辞書類の多くは、洋装に改められ、手作りのインデックスを施されて、使いやすくなっている。また、より専門性の高い辞書類も揃えられており、助字の性質を論じた『助語審象（じょごしんしょう）』（文化14（1817）年刊）[11]や古今

5 漢文訓読法の一つ。儒者後藤芝山（1721-1782）が四書・五経に施した訓点。

6 朱熹註 尾張 永栄堂 文化9（1812）年 3冊 ＜請求記号Ser.607＞

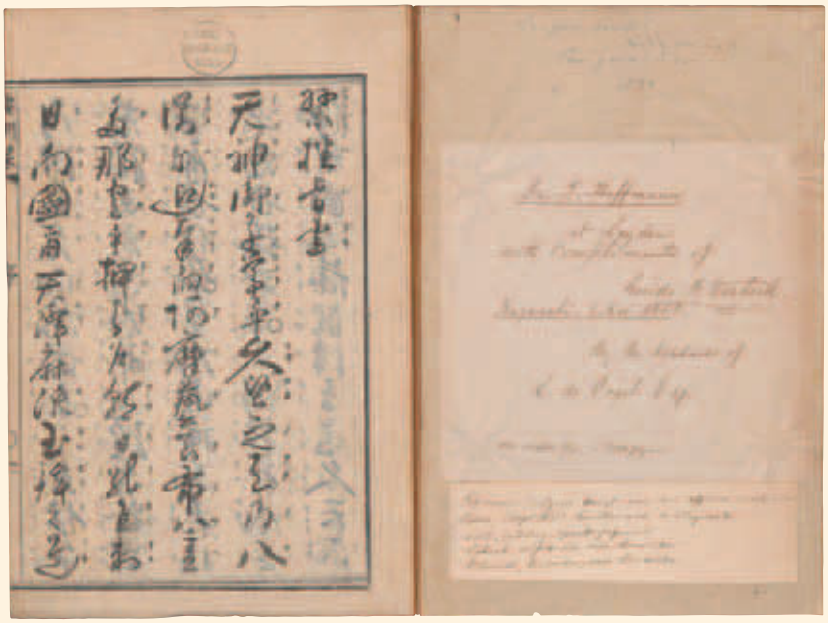
7 朱熹［撰］朱錫旅校 佐藤坦点 大坂 秋田屋太右衛門［ほか9名］安政2（1857）年 10冊 帙入 ＜請求記号Ser.611＞

8［舎人親王］［編］無刊記 改装1冊 ＜請求記号Ser.420＞

9 毛利貞齊編 大坂 大野木市兵衛［ほか5名］安永9（1780）年 改装1冊 ＜請求記号Ser.33＞

10 大坂 木屋伊兵衛［ほか2名］万延元（1860）年 改装1冊 ＜請求記号Ser.39B＞

11 威如斎口授 釈海定、三上惇、宮永寅筆録 尾州 永楽屋東四郎［ほか5名］文化14（1817）年 改装3冊 ＜請求記号Ser.53＞



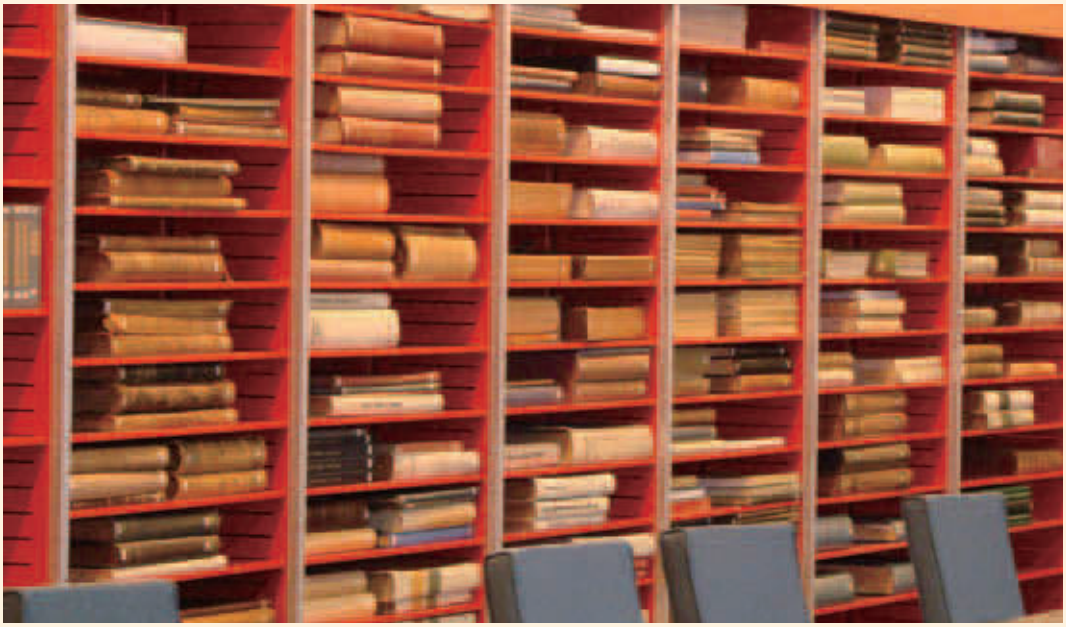
左 写真⑩ 谷川士清纂『倭訓栞［前編］』巻ノ一 津 篠田伊十郎［ほか4名］文政13（1830）年改装9冊 ＜請求記号Ser.45＞
上 写真⑪ ライデン大学図書館特別コレクション室の日本資料書架

の和語の意味や成立ちを論じた『倭訓栞』（写真⑩）は、ホフマンが自身の日本語研究のために最も拠り所とした辞書である。『助語審象』は、幕末に長崎の海軍伝習所に赴任したカッテンディーケ（Willem Johan Cornelis ridder Huyssen van Kattendyke, 1816-1866）によって1860年頃に届けられた。『倭訓栞』の前編は、前述のフォーヘルがオランダ系アメリカ人宣教師のフルベッキ（Guido Fridolin Verbeck, 1830-1898）から預かり1861年にホフマンに届けられた。中編は、1860年代後半から1870年前後に、やはり来日したオランダ人によって届けられたものと思われるが、複数の可能性があり、特定できていない。

「文学」に含まれるものの多くは合巻などの草双紙類であるが、商館長ステュルレル（Johann Wilhelm de Sturler, 1774-1855）の遺品として、1855年にその子息から譲り受けたものである。ステュルレルの収集書籍は、フランス国立図書館にも寄贈されているが、それより前にホフマンに差し出され、約40冊程度が選ばれたと考えられる。フランス国立図書館所蔵のステュルレルに由来すると言われる資料に、明らかにホフマンのところで混ざったと思われるステュルレル以外の由来を示すサインが見られるからである。ホフマンはこの寄贈に非常に感謝し、著書*Proeve eener Japansche Spraakkunst* および *Japansche Spraakleer* の序文で繰り返し謝意を述べている。

地図の収集方針は明確で、江戸、大坂、京都、長崎という重要拠点と開港地および東海道や木曽路等主要な道についての情報である。その他、植物書、園芸書、蚕書など、実用的な書物も多数集めた。

これらの書籍は、ロドリゲスの文典の内容を一つ一つ吟味し、新しい日本語文法の理論を示そうとしていたホフマンの重要な情報源であった。収集した本から文や表現を拾い、その意味を成立ちに戻って分析しようと努力を重ねた。また、実用書や地図については、政府翻訳官として、また数少ない日本語に堪能なヨーロッパ人として、必要とされる知識を提供していくために集められたと考えられる。蔵書はおよそ1840年代末から1870年の未だ日本の書籍を手に入れることが難しい時代に構築された。ホフマン自身は日本の地を踏んだことはなく、寄贈あるいは既に手元にある資料



写真⑫
ライデン大学図書館
特別コレクション室

の本文や広告で言及されているタイトルを知人に頼って手に入れるという方法をとったと考えられる。したがって、いわゆる珍書や稀書の類は少なく、駐日外交官として日本に渡ったアーネスト・サトウ(Ernest Mason Satow, 1843-1929)らがヨーロッパに持ち帰ったコレクションと比べると数的にも質的にも見劣りはするかもしれない。

しかし、である。シーボルトやフィッセルなど名の知れたコレクターの収集書籍と同じ書架に並びながら、ほとんど顧みられることなく130年を過ごしたホフマン旧蔵書が、再度発見されたことの意義は大きい。しかも、幸いなことにホフマンに関しては多くの文書資料が残っている。これらの資料を手がかりに、ホフマン旧蔵書が集められた目的や方法、そして彼がこの時期にライデンに留まったことによって果たし得たことをつぶさに確認していくことで、これまで知られていなかった歴史の一断面が見えてくるのではないか。そんなことが期待させられる。

（おくだ　ともこ　関西館電子図書館課）

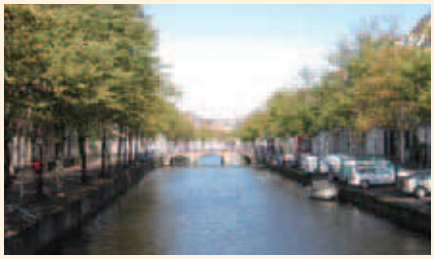
※本稿の請求記号は特段のことわりがない場合、ライデン大学図書館の請求記号。

参考文献

●R.Effert, *Royal Cabinets and Auxiliary Branches : origins of the National Museum of Ethnology, 1816-1883*（Leiden : Research School CNWS, 2008）

●W.J.ボート 著 「J.J. ホフマンと日本学の誕生」志筑忠雄没後200年記念国際シンポジウム実行委員会，長崎大学「オランダの言語と文化」科目設立記念ライデン大学日本語学科設立150年記念国際シンポジウム実行委員会 編『蘭学のフロンティア：志筑忠雄の世界：志筑忠雄没後200年記念国際シンポジウム報告書』（長崎：長崎文献社，2007）pp.129-140.

●奥田倫子「ライデン大学図書館特別コレクション室における研究促進とデジタル化」『カレントアウェアネス』2012,（311），pp.7-11.（http://current.ndl.go.jp/ca17649）



写真⑬
ライデンを流れる運河
ラーペンブルグ

世界の日本関係資料を集めています

マルコ・ポーロが東方見聞録で「黄金の国ジパング」と紹介して以来、日本は世界から関心を集めてきました。例えば、16世紀後半には、日本に来たイエズス会の宣教師たちが黒地に金の模様が燦然と輝く蒔絵に魅せられ、キリスト教の祭具に取り入れました。このような歴史的背景から、ヨーロッパで日本の漆器が流行し、「japan」という単語が「漆、漆器」の意味で使われるまでになりました。このことは、1688年に刊行された *A treatise of japanning and varnishing*（漆とワニスの技術論）という本のタイトルでも確かめられます。日本文化がいかに外国に受容されたかは、出版物からも知ることができるのです。

このため、外国資料課選書係では、海外で出版された日本関連の資料を広く収集しています。特に、政治、法律、経済、教育、歴史等の分野の学術書は漏らさず収集するよう努めています。

海外で日本語から翻訳出版された資料や、海外で日本人が出版した資料も収集対象です。ニューヨークでは、村上春樹の『1Q84』の英訳本発売日には書店で行列ができたそうですが、他に、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ノルウェー語版等も収集しました。

日本漫画の翻訳本も収集し始めました。

『Naruto』などの人気のある作品や、谷口ジローの『神々の山嶺』などの国際的な漫画賞受賞作品を中心に収集していく予定です。繊細な画風の谷口ジローはヨーロッパで高く評価され、バンド・デシネと呼ばれるフランス漫画のスタイルで *Mon année*（私の一年）という書き下ろし作品も出版しています。

また、昨年からは東日本大震災に関する資料も力を入れて収集しています。津波や原発に関する資料の他、海外アーティストによる復興支援活動等の資料も集めています。

海外で出版された日本関係の資料を収集、保存し、後世に残すことは、国立国会図書館の重要な仕事の一つです。

（外国資料課選書係　FJ）

海外に渡った日本人の足跡

憲政資料室所蔵 日系移民関係資料のご紹介

国立国会図書館は、海外において出版、作成された、①日本人や日系人によって書かれた資料、②日本語で書かれた資料、③言語を問わず日本に関することをテーマとして書かれた資料などを日本関係資料として収集しています。

東京本館の憲政資料室では、この日本関係資料の一分野として、日系移民関係資料を所蔵しています。ここでは、憲政資料室所蔵の日系移民関係資料の概要などをご紹介します。

ブラジル日系移民の農家の様子（年代不詳）＜橋田正夫関係資料　文書番号96－9＞

日系移民関係資料の収集の経緯

日本最初の集団での海外移民は、明治元（1868）年にグアムやハワイなどへ渡ったのが始まりです。その後、米国、メキシコ、ブラジル、ペルーなどへ、多くの日本人が成功を夢見て希望を抱き、移民として新天地へ旅立ちました。現在は、日本から移住した一世の人数は少なくなり、全く日本語を解さない世代が増えてきています。

国立国会図書館では、昭和56（1981）年度に日系移民関係資料の収集についての調査を開始し、米国およびブラジルにおける日系人に関する図書などの個人コレクションを購入しました。この背景には、日系人の世代交代が進み、資料が散逸することへの危機感がありました。

写真は上から時計回りに、しあとる丸船上での光景2点（大正6（1917）年7月および6月）、農家の様子（ブラジル、年代不詳）、焼畑作業の様子（ブラジル、年代不詳）　以上4点が＜橋田正夫関係資料 文書番号96－9＞
「ドアルチーナ町全景」（ブラジル、1938から1940年頃）栗原自然科学研究所 在伯日本移民歴史調査記録＜移(一)－646 文書番号17 福寿植民地＞

また、昭和58（1983）年の国会議員団のブラジル・サンパウロ訪問を契機に日系移民関係資料の収集の重要性が指摘され、昭和59（1984）年度から平成2（1990）年度まで「南米移民資料収集七か年計画」によって中南米に収集担当職員を派遣し、その後の平成5（1993）年度および平成6（1994）年度にはハワイに収集担当職員を派遣して資料の収集に当たりました[1]。この時期に収集した資料が憲政資料室での日系移民関係資料の中核をなしています。

なお、職員を現地に派遣して資料を収集する活動は、平成6（1994）年度に終了しています。その後は、主に資料所蔵機関へのマイクロ撮影での複写申込みにより資料を収集しています。平成10（1998）年度からは、米国国立公文書館所蔵資料や、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下、UCLA）特別コレクション部所蔵資料の収集を行っています。

憲政資料室所蔵の日系移民関係資料の構成

憲政資料室所蔵の日系移民関係資料の特色は、日系移民らが移住先での活動で残した記録や収集した個人のコレクション、移民を受け入れた国々で残された資料など、大部分が収集担当職員を現地に派遣して収集した資料で構成されている点にあります。

資料収集を行った国は、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、メキシコ、米国（本土およびハワイ）、カナダなどです[2]。

資料の形態・内容は、現地の日系人関係の刊行物（図書・雑誌など）や、個人の日記、書簡、会社の業務関係の書類などの私文書類、移民の乗船記録などの公文書類です。

1　経緯については、本誌343（1989年10月）号 pp.2-10 村木栄四郎「移民関係資料収集の現状と今後の計画」参照。

2　ボリビア、パラグアイ、ドミニカ共和国においても資料収集を行ったが、これら3か国の資料は非常に少ない。

現在も新規刊行物を受け入れているものはほとんどありませんが、数量は、図書が日本語・外国語をあわせて約4,000冊、雑誌が約800タイトル[3]、文書類は約9,000点です。また、これらとは別にマイクロフィルム資料が約1,250リールあり、その内容の多くは文書類です。

資料の紹介

憲政資料室で所蔵している日系移民関係資料の特徴は、移住先での活動やその歴史などを、個人や団体の個別の文書類などから知ることができることです。ここでは、特に日本からの渡航の記録、教育、第二次世界大戦関係の資料の一部についてご紹介します。なお、＜ ＞内は国立国会図書館の請求記号で、また、資料の媒体について記述がないものはマイクロフィルムの資料です。

渡航の記録

移民の足跡をたどる基本的な資料として、ブラジルへの移民名簿および米国本土への乗船名簿があります。いずれも渡航時期別にまとめられています。

「ブラジル日本移民史料館所蔵 伯剌西爾行移民名簿（乗船名簿）」＜移（一）－D5＞は、ブラジルへの移民事業を請け負った事業者によって作成されたもので、明治41（1908）年の第1回から昭和38（1963）年までのものです。明治41（1908）年および明治43（1910）年と、昭和2（1927）年から昭和16（1941）年までの名簿は、国立国会図書館ホームページの「国立国会図書館デジタル化資料」で公開しています[4]。

「ブラジル日本移民史料館所蔵 伯剌西爾行移民名簿（乗船名簿）」＜移（一）－D5＞ リール番号1　明治41（1908）年のブラジルへの最初の集団移住者の名簿

米国本土への渡航についての資料としては、「サンフランシスコ到着船舶乗船名簿」＜VE612－2＞（原資料の所蔵機関：米国国立公文書館）があります。これは、サンフランシスコへ到着した船舶から提出された乗船名簿です。明治26（1893）年から昭和28（1953）年までのものがあり、この中に米国への移民の氏名が含まれています[5]。

渡航の事跡は、移住者の出身地と移住先を手がかりに、日系人団体などの資料の中から見出せる場合もあります。各国・地域の県人会の記念誌に、

3　憲政資料室で所蔵する国内外で刊行された日系移民関係の出版物は、この分野に関する国立国会図書館の所蔵資料の一部であり、その他は、憲政資料室以外の図書・雑誌・新聞資料として所蔵されている。

4　http://dl.ndl.go.jp/　トップページの「電子図書館」からアクセスする。館内限定で大正15（1926）年までの名簿もデジタル資料で閲覧できる。ただし、これらは憲政資料室所蔵資料からデジタル化したのではなく、東京本館で図書資料として所蔵している資料からデジタル化したものである（書き込みの有無などの異同がある）。
また、ブラジル・サンパウロ州移民博物館（Museu da Imigração do Estado de São Paulo）のホームページには、氏名を入力すると乗船した船舶の名称やブラジル到着期日、出身地などを検索することができるデータベース「Registros de matricula」がある。
http://www.museudaimigracao.org.br/acervodigital/livros.php

5　他に国立国会図書館では、明治23（1890）年から昭和32（1957）年までのシアトルとその他のワシントン州への到着船舶の乗客名簿のマイクロフィルムを所蔵している。「Passenger and Crew Lists of Vessels Arriving at Seattle」＜YE－136＞（図書第一別室で請求・閲覧）
また、憲政資料室所蔵資料では、「ペルー日本人移住史料館所蔵資料」＜移（三）－D2＞に、明治32（1899）年から大正12（1911）年までの乗船名簿があり、「在メキシコ大使館所蔵資料」＜移（三）－D9＞に、1960年代のメキシコ在留日系人の名簿がある。

日系人の活動の歴史や個人の評伝が収録されていることなどが多くあります。出身地別ではありませんが、「日系アメリカ人研究プロジェクト 米国における日本人に関する資料コレクション」[6] ＜VE611－1＞（原資料の所蔵機関：UCLA）には、大正時代や昭和戦前期の米国の様々な州の日本人会の資料があり、会員名簿や活動の記録などが含まれています。

日系アメリカ人研究プロジェクトとJARPコレクション

「日系アメリカ人研究プロジェクト」（Japanese American Research Project；JARP）とは、日系アメリカ人市民連盟とカリフォルニア大学ロサンゼルス校が1960年代に行った日系人についての調査のことです。この時に収集された資料が、「JARPコレクション」として同校の図書館「リサーチライブラリー」の特別コレクション部で公開されています。この図書館ではJARPコレクション以外にも日系人関係の個人文書を所蔵していて、憲政資料室では、これらから選択してマイクロフィルムで収集しています。また、カリフォルニア大学図書館が運営するインターネットのサイト「Calisphere」には、日系人強制収容の歴史を学ぶためのページ「Japanese American Relocation Digital Archives」があり、多数の文書・写真・絵画を見ることができます[7]。

教育

移民にとって子どもの教育は重要でした。開拓地では、生活に余裕がない中でも移民自ら学校を設立しました。『平野廿五周年史』（図書）＜移（一）－4＞[8]では、移民が施設を準備し、教員を日本などから呼び寄せた当時の状況が説明されています。

授業の多くは日本語で行われていましたが、この背景には、子どもを「日本人」として育てたいという希望や、将来の日本への帰国が意図されていたことがあったのでしょう。しかし、現地日系人の教育者からは、日系人が現地の社会に定着するためには、このような考え方は好ましくないと見られていました。

「聖州義塾・小林美登利関係資料」（文書資料）は、戦前のブラジル・サンパウロの日本人学校の資料であり、その生徒募集や教育課程など学校運営の実態がうかがえる資料です。この学校では、教育

『ペルー沖縄県人移民七十五周年・ペルー沖縄県人会創立七十周年記念誌』 伊芸銀勇編 リマ ペルー沖縄県人会 1987年 770p 27cm ＜移（二）－82＞

6 Japanese American Research Project Collection of material about Japanese in the United States, 1893-1977
7 http://www.calisphere.universityofcalifornia.edu/jarda/
8 平野植民地日本人会［編］・刊 ［サンパウロ］ 1941年 135p 28cm

の目標を善良で優秀な日系ブラジル市民を育成することとしていました[9]。『アルゼンチンに於ける第二世の日本語教育』（図書）＜移（三）－112＞[10]では、日本語学校は現地の公立学校を補完するものであることを強調しています。

ハワイでは、1920年代に日本語学校に対する規制が強化されましたが、『布哇ノ日本語学校ニ関スル試訴及ビ附帯事件』（図書）＜VE2－293＞[11]は、訴訟を起こして規制を撤廃させた人々の記録です。これは「試訴事件」と呼ばれています。規制の理由が日本人の米国への同化を進めることであったため、同じ日系人の間でも、訴訟が日系人の立場や日米関係の悪化を招くことを懸念する訴訟反対派と、規制が最終的に日本語学校の廃止に結びつくと考えたり、日系人の親子間の意思疎通に日本語教育が必要とする訴訟推進派とに、意見が分かれていたという複雑な事情もこの資料から知ることができます。

『聖州義塾々報』第2号　サンパウロ　聖州義塾 1931年
＜聖州義塾・小林美登利関係資料　文書番号152＞
聖州義塾の事業概要がまとめられている

ブラジルの俳句

ブラジルの日系人の間では今も俳句が盛んです。『ブラジル俳文学』（雑誌）＜移（0）－Z11＞[12]では、開拓の苦労やブラジルの自然を詠んだ作品が収録されていて、日系移民ならではの感情に触れることができます。また、『のうそん』（雑誌）＜移（一）－Z1＞[13]には、現地の生活の中に題材を求めた随筆や俳句などがあります[14]。

『ブラジル俳文学』332（2012年1月）号　ブラジル俳文学会［編］・刊　São Paulo　2012年　＜移（0）－Z11＞

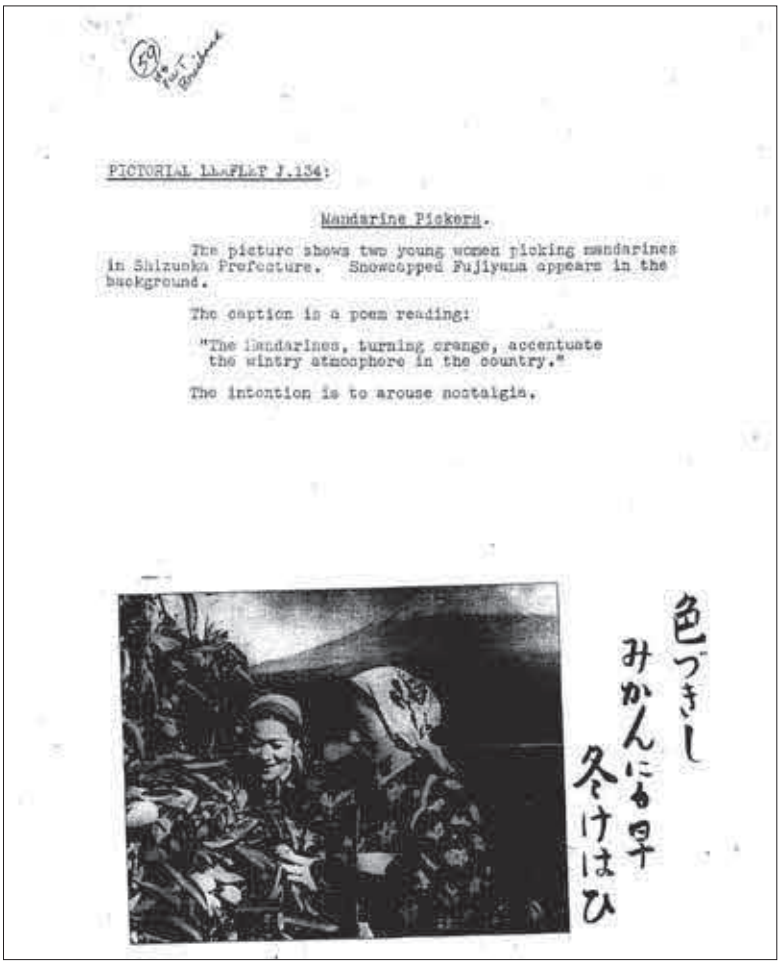
9　「我等の養はんとする精神」『聖州義塾々報』第2号　サンパウロ　聖州義塾　1931年　＜聖州義塾・小林美登利関係資料文書番号152＞
10　前川留次郎著　在亜日本語小学校刊　1938年　104p　23cm
11　布哇報知社［編］・刊　ホノルル　1926年　133p　28cm
12　ブラジル俳文学会［編］・刊　São Paulo　当館は92（1993年1月）号から所蔵
13　日伯農村文化振興会［編］・刊　サンパウロ　当館は創刊（1969年7月）号から所蔵
14　これらは近年の刊行分も憲政資料室に所蔵がある。

第二次世界大戦関係（日米開戦など）

日米開戦時に米国西海岸に住んでいた日系人は、米国への敵対行為のおそれがあるとして強制的に収容されました。「戦時転住局現地基本文書」[15]＜VE612－1＞（原資料の所蔵機関：米国国立公文書館）、「マンザナ戦時転住センター文書」[16]＜VE611－4＞（原資料の所蔵機関：UCLA）は、強制収容に関する政策やその実際の記録です。

収容された日系人の中には、米国への忠誠を示すために米国の軍隊へ志願した者もいました。「カール・ヨネダ文書」[17]＜VE611－5＞（原資料の所蔵機関：UCLA）は、心理戦を扱う部隊で軍務についたカール・ヨネダの資料です。彼が製作にかかわり、日本軍の戦意を喪失させるために戦地で散布された宣伝ビラの検討過程が分かる資料が含まれています。

日本人の移住先であった中南米の国々は、第二次世界大戦時には米国の強い影響下にあり、日米開戦に伴って各国の日系人は厳しい立場に置かれました。特にペルーでは日系人有力者が米国へ連行されたり、事業が接収されたりしました。「ペルー日本人移住史料館所蔵資料」＜移（三）－D2＞には、経済基盤を失った日系人に対して日本政府から支給された支援金（中立国だったスペインなどが仲介しました）の記録が含まれています。「バーンハート文書」[18]＜VE611－7＞（原資料の所蔵機関：UCLA）には、米国に連行された日系ペルー人の審問記録などがあります。


PICTORIAL LEAFLET J.134:

Mandarine Pickers.

The picture shows two young women picking mandarines in Shizuoka Prefecture. Snowcapped Fujiyama appears in the background.

The caption is a poem reading:

"The mandarines, turning orange, accentuate the wintry atmosphere in the country."

The intention is to arouse nostalgia.

色づきし
みかんに早
冬けはひ

写真上
『光輝』 創刊号（1947年12月号） 光輝社［編］・刊 サンパウロ＜移（一）－Z19＞ ブラジルの戦勝派が発行した雑誌。当館の所蔵は創刊（1947年12月）号、第2巻第1・2（1948年1・2月）号、第3（1948年3月）号、第4・5（1948年4・5月）号、第6・7（1948年6・7月）号、第8・9・10（1948年8・9・10月）号
写真左
「カール・ヨネダ文書」＜VE611－3＞ リール番号34
宣伝ビラの検討過程を示す文書

また、ブラジルでは、日本が戦争に勝利したと信じた戦勝派（勝ち組）と、敗戦を現実として受け入れた認識派（負け組）とが対立し、戦勝派による殺人事件も起きました。「ブラジル日本移民史料館所蔵 展示資料」＜移（一）－D4＞には、戦勝派が発行した通信や事件を報じる当時の新聞記事の切抜きが収録されています。

資料の検索

憲政資料室所蔵日系移民関係資料の一部については、国立国会図書館のホームページから検索することができます。「憲政資料室の所蔵資料」のページ[19]に「日系移民関係資料」の見出しがあり、この中の「文書類」と「刊行物」から検索します。「文書類」のページでは、一部の資料について解説を付していて、資料の概要や旧蔵者の情報、資料の構成などを知ることができます。「刊行物」のページには、憲政資料室で収集した日系移民関係の図書（日本語・外国語）と雑誌・新聞（日本語）の目録が掲載されています（新聞資料室所蔵分も含む）。日本語の図書は「NDL－OPAC」でも検索できます[20]。

15 Field Basic Documentation of the War Relocation Authority, 1942-46
16 Manzanar War Relocation Center Records, 1942-1946
17 Karl G. Yoneda Papers
18 Barnhart Papers
19 http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/ 「リサーチ・ナビ」から「文書類（憲政・占領期・日系移民）」にアクセスする。
20 https://ndlopac.ndl.go.jp/ トップページの「蔵書検索」からアクセスする。日本語の図書のほかに、新聞資料室で所蔵している日系移民関係の日本語新聞もNDL－OPACで検索できる。また、OPACで検索することができる資料は、「NDLサーチ」からも検索することができる。

電子展示会「ブラジル移民の100年」

日本からのブラジルへの集団的な移民は、明治41（1908）年に開始されました。平成20（2008）年に100周年を迎えたのを機に、国立国会図書館ではインターネットで見ることができるブラジルへの日系移民に関する電子展示会を作成しました。ブラジルへの移民の歴史を、所蔵資料などの多数の画像を使用しながら紹介しています。また、前史として、日本最初の集団での海外移民であるハワイへの移民や、我が国の政策などにも言及しています。

電子展示会「ブラジル移民の100年」（http://www.ndl.go.jp/brasil/index.html）

これらでは確認できない「文書類」と「刊行物」の資料および諸事項や、外国語の雑誌・新聞については、憲政資料室に備え付けの目録および「国立国会図書館特別資料室所蔵 移民関係資料目録 平成9年3月末現在」＜D1－G68＞でお調べいただくことになります。

おわりに

憲政資料室が所蔵する日系移民関係資料は、もとより日本の移民史を網羅するものではありませんが、他で所蔵されている資料とあわせて利用することによって、日系移民に関する調査・研究に役立てていただければ幸いです。

（利用者サービス部政治史料課）

参照文献

●三塚俊武「ブラジルの日本移民資料　その実態と収集計画」『国立国会図書館月報』（279）1984.6 pp.2-9

●大口欣一「移民資料収集で渡伯して　ブラジルあちこち見てある記」『国立国会図書館月報』（287）1985.2 pp.24-27

●花満弘文「南米における日本移民関係資料を求めて　伯国（ブラジル）とその周辺諸国」『国立国会図書館月報』（313）1987.4 pp.2-9

●和田上英雄「南米の日系社会とその資料」『国立国会図書館月報』（325）1988.4 pp.2-9

●村木栄四郎「移民関係資料収集の現状と今後の計画」『国立国会図書館月報』（343）1989.10 pp.2-10

●一星章文「中南米諸国における移民資料収集に携わって」『国立国会図書館月報』（387）1993.6 pp.16-21

●「冊子目録落穂拾い（国立国会図書館特別資料室所蔵 移民関係資料目録）」『参考書誌研究』（49）1998.3 pp.47-49

●「電子展示会『ブラジル移民の100年』―資料の収集から電子展示会の提供まで」『国立国会図書館月報』（576）2009.3 pp.15-17

●眞子ゆかり「国立国会図書館憲政資料室所蔵 日系移民関係資料（特集 続・地域関連コレクション―中東・アフリカ・ラテンアメリカ）」『アジ研ワールド・トレンド』17-3（186）2011.3 pp.29-31

憲政資料室における日系移民関係資料の利用について（概要）

場所　東京本館4階

開室時間　9時30分から17時まで
（日曜日・祝日・第3水曜日・年末年始を除く）

資料請求票受付時間
9時30分から16時まで

入室時に、閲覧許可申請書（当室備え付け）に氏名・調査テーマなどを記入していただきます。また、閲覧は当館の登録利用者に限らせていただいています。

複写については、資料保存上の必要性や原資料所蔵機関との取り決めなどから、複写方法に制限のある場合や複写自体ができない場合があります。

ホームページの「憲政資料室の利用案内」もあわせてご参照ください。（http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/guide.php）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
ここでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

中野を語る建物たち
中野区大正期・昭和前期建造物調査報告書

中野区教育委員会事務局生涯学習分野文化財担当刊
2011.3　195頁　30cm　　＜請求記号　KA81-J137＞

中野で目につく建物といえば、中野サンプラザが筆頭に挙げられるだろう。中野区のランドマークとして長く存在し、平成25年には開業40周年を迎える。一部で「オタクの聖地」として名高い中野ブロードウェイも45年の歴史を誇り、中野という街のイメージの一部を形成している。

しかし、それらは本書には登場しない。「中野を語る建物」として取り上げられるものの多くは、特に名のある建物ではなく、主に戦前までに建てられた住宅を中心とした、人々の生活に直接関わる建物である。それら街中にある建物を区内777軒にわたって調査し、得られた結果をまとめたものが本書である。

本書の眼目は、13軒の建物の来歴や写真・図面が掲載されている第8章「詳細調査報告」や、87軒について写真と聞き取り調査の結果が載せられている第7章「データ編」にあると言えるだろう。多くは無名とはいえ、それぞれに歴史を積み重ねて現在に至っている建物についての記録である。本書で紹介される、現所有者から得られた建物にまつわるエピソードからは、個々の建物やそこに住まう家族の歴史、それぞれの建物が存在してきた周囲の状況を垣間見ることができる。

現在も住人のある「沢庵御殿」と呼ばれた住宅は、今やほとんど住宅街となった中野区も、かつては練馬大根が産物の農村であり、漬物作りが重要な産業であったという事実に気づかせてくれる。童謡「たきび」の着想を与えたのが中野の農村風景であったことなどは、今ではなかなか想像しがたいことではないだろうか。

その中野区にもサラリーマンや学者などの新住民が流入し、戸建ての洋風建築が建てられたり、会社の社員寮が建てられたりするなど、宅地化が進行していった。

今は一軒家に見える建物も、昭和戦前期に地主が開発した当初は、同じような建売りの家が並ぶ区画内の一軒だったという。これなど、建物を外から見るだけでは知り得ない事柄で、中野区が住宅地として開発されていく過程がうかがえて興味深い。

関東大震災や戦災の被害を受けて移り住んで来た例も多い。避難してきた新たな住人が建てた家も、今や中野区の風景を作り上げる要素となった。

それらのディテールが提供されているがゆえに、鉄道の開通などに伴った区の発展を概観する第4章「中野の概要」の記述も、単なる一般論ではなく、裏付けのある記述として読むことができるようになっている。

この調査は平成19年から行われたが、報告書に編まれるまでの間に、取り壊されて姿を失った建物もあるという。一つ一つの建物は、現在の町並みを構成するだけではなく、その場所の歴史も体現している。建物が失われることで、歴史をたどるきっかけの一つがなくなってしまうことを思うと、本書のような報告書の意義を強く感じる。

（利用者サービス部政治史料課　藤田（ふじた）　壮介（そうすけ））

※現在、入手不能。当館ほか、中野区立図書館等で閲覧可能。

「私たちの使命・目標2012－2016」を策定しました。

平成24年7月、国立国会図書館は、これまでの「国立国会図書館60周年を迎えるに当たってのビジョン」に代わり、新たに「私たちの使命・目標2012－2016」を策定しました。これは、国立国会図書館の果たすべき使命と、その使命の下で5年間にわたって取り組む6つの目標を掲げるものです。

1　私たちの使命

国立国会図書館は、出版物を中心に国内外の資料・情報を広く収集し、保存して、知識・文化の基盤となり、国会の活動を補佐するとともに、行政・司法及び国民に図書館サービスを提供することを通じ、国民の創造的な活動に貢献し、民主主義の発展に寄与します。

2　目標

目標１：国会の活動の補佐

国政課題に関する信頼性の高い専門的調査・分析と迅速かつ的確な情報提供を一層強化して、国会の活動を十全に補佐します。

目標２：収集・保存

納本制度を一層充実させて、国内出版物の網羅的収集に努めるとともに、印刷出版物にとどまらず、電子的に流通する情報を含め、様々な資料・情報を文化的資産として収集し、保存します。

目標３：情報アクセス

国立国会図書館の収集資料を簡便に利用し、また必要な情報に迅速かつ的確にアクセスできるように、新しい情報環境に対応して、資料のデジタル化、探索手段の向上など、誰もが利用しやすい環境・手段を整備します。

目標４：協力・連携

国内外の関係機関と連携して、知識・文化の基盤を一層豊かにし、人々の役に立つものとします。

目標５：東日本大震災アーカイブ

未曽有の災害の記録・教訓を後世に確実に伝えるための東日本大震災アーカイブを構築します。

目標６：運 営 管 理

透明性が高く効率的な運営管理を行い、高度なサービス提供を担うことができる人材を育成し、また必要な施設を整備します。

「私たちの使命・目標2012－2016」は、国立国会図書館ホームページでもご覧になれます。

http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/mission2012.html

国立国会図書館（http://www.ndl.go.jp/）

＞国立国会図書館について

＞私たちの使命・目標2012－2016

（総務部企画課）

新副館長就任

田屋裕之国立国会図書館副館長が平成24年9月10日付けで退職し、同日付けで池本幸雄が副館長に任命された。

第2回科学技術情報整備審議会

8月29日、東京本館において、第2回科学技術情報整備審議会が開催された。有川節夫委員長（九州大学総長）ほか委員8名、国立国会図書館からは、館長ほか12名が出席した。当館から、第三期科学技術情報整備基本計画（本誌610号参照）の進捗状況と今後の取組として、当館が進める各種事業の概況、特に、東日本大震災アーカイブについて全体イメージや関係機関との連携協力などの取組状況について報告した。

その後の質疑および懇談では、今後も資料デジタル化を継続して実施していく必要性を踏まえ、国立国会図書館だけで実施するのではなく、様々な機関と協力して進めていくよう提案があった。東日本大震災アーカイブについては、目指す方向性および利用イメージを明示することへの要望や、公文書館との協力の重要性について指摘があった。第三期科学技術情報整備基本計画に掲げている「知識インフラ」（国全体の新しい学術情報基盤）の構築に関しては、国立国会図書館はこれまで研究成果物を扱ってきたが、今後は、研究プロセスで発生する情報にも関心を持つべきであり、その際、実験・計測機器等から集められた多様で大量のデータ、いわゆるビッグデータに関わる動きについても意識する必要があるとの指摘があったほか、学術情報流通の強化策として注目されているオープンアクセス誌と、平成25年7月の改正国立国会図書館法施行後の納入義務との関係について質疑があった。

審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞国立国会図書館について＞審議会・科学技術情報整備審議会（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/council_technology.html）に掲載している。

■『活動実績評価に見る平成23年度の国立国会図書館』を刊行しました

国立国会図書館は、効率的で質の高い活動の実現、国の機関としての説明責任の履行等に資するものとして、毎年、活動実績評価を行っています。例年6月末を目途に、前年度分の評価報告書を取りまとめ、公表しています。

平成23年度評価については、従来からの評価表の作成・公開に加え、活動実績評価事業報告書『活動実績評価に見る平成23年度の国立国会図書館』を刊行しました。平成23年度に重点的に取り組んだ事業の実施状況、成果と課題等をご紹介しています。

この報告書は国立国会図書館ホームページで全文をご覧になれます。

○URL　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/pdf/h23_report.pdf

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）

＞国立国会図書館について＞活動実績評価＞平成23年度活動実績評価事業報告書

○お問い合わせ先

国立国会図書館　総務部 企画課　評価係

電子メール　hyoka@ndl.go.jp

『活動実績評価に見る平成23年度の国立国会図書館―平成23年度国立国会図書館活動実績評価事業報告書』
平成24年7月　国立国会図書館刊　A4　16頁　英文併記

国立国会図書館 関西館開館10周年記念 国際シンポジウム「図書館サービスとe戦略」のご案内

国立国会図書館は、関西館開館10周年を記念し、英国図書館電子戦略情報システム部構築開発長ショーン・マーティン（Sean Martin）氏を迎えて、国際シンポジウムを開催します。

開館以来10年、国立国会図書館関西館は主要な事業の一つとして電子図書館事業に取り組み、インターネットを活用した各種サービスの拡大に大きな役割を果たしてきました。本シンポジウムでは、インターネットのさらなる利活用が進む現況に対応し、今後も社会に意義ある存在として図書館サービスを展開するための戦略を、国内外の有識者の知見を通じて多角的に考察します。

マーティン氏による基調講演では、2020年の図書館サービスを見据えた英国図書館の戦略と、戦略のもとに実現・計画されている電子図書館サービスについて、先進的な諸外国の事例も交えて、解説します。パネルディスカッションでは、マーティン氏のほか、荒木浩氏（国際日本文化研究センター教授）、植村八潮氏（専修大学文学部教授、出版デジタル機構取締役会長）、丸山高弘氏（地域資料デジタル化研究会副理事長、山中湖情報創造館長）をパネリストとして迎え、当館職員も参加して今後の方向性について討議します。入場は無料です。是非ご参加ください。

○日　　時　平成24年11月9日（金）13:30～17:00
○会　　場　関西館　大会議室（定員300名）
○お申込方法　11月7日（水）17:00までに、次のいずれかの方法でお申し込みください。定員に達した時点で受付を終了します。

マーティン氏

［ホームページ］参加申込みフォームからお申し込みください。
URL　http://www.ndl.go.jp/jp/event/index.html
国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）
＞イベント・展示会情報

［ファクシミリ］　次の事項を明記の上、下記FAX番号あてにお申し込みください。
①シンポジウム名「図書館サービスとe戦略」、②氏名（ふりがな）、③FAX番号、④電話番号（日中のご連絡先）

○関西館10周年記念のページ
http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/about/10th_anniversary.html
○お申込み・お問い合わせ先
国立国会図書館 関西館 総務課　FAX　0774（94）9106
電話　0774（98）1224（直通）
電子メール　ml-k-symposium@ndl.go.jp

国立国会図書館関西館開館10周年記念展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」のご案内

国立国会図書館関西館は、本年10月に開館10周年を迎えます。

関西館は、年々増加する図書館資料を収蔵するための大規模書庫を確保するとともに、情報通信技術の急速な発展に対応した電子図書館サービスの拠点として設置され、これまでに様々なサービスを行ってきました。

記念行事の一つとして、関西館の設立に関する資料や活動の成果物、関西館所蔵の貴重なコレクションをご紹介する展示会を開催します。本展示会では、展示構成を

第Ⅰ部：関西の図書館100年

第Ⅱ部：関西館の10年

の二部にわけ、関西館の設立構想から現在に至るまでの歩みとともに、明治時代から現在に至るまで、関西地域の図書館の近代史についてもご紹介します。

入場は無料です。ぜひご来場ください。

○開催期間	平成24年10月1日（月）～31日（水） （日曜日、国民の祝日・休日、第3水曜日除く）
○開催時間	10:00～18:00
○会　　場	関西館　大会議室

このほか、関西館の10年のあゆみと活動を多くの方に知っていただくために、講演会、シンポジウムなどの記念行事を予定しております。詳細は、本誌や国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp）でも随時お知らせしています。

○お問い合わせ先

国立国会図書館 関西館 総務課　電話　0774（98）1224（直通）

『東壁』第1号 1901年4月 関西文庫協会
＜請求記号　雑59-37＞
京都帝国大学附属図書館を中心に結成された関西文庫協会の機関誌。わが国で初めて、図書館学「ビブリオテックス、ウイセンシャフト」関係の論説記事を掲載した雑誌とされる。

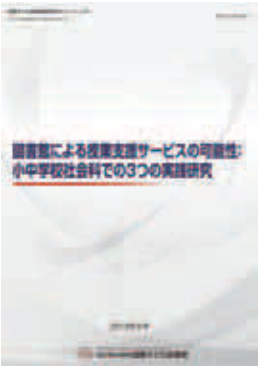
子どものための音楽会「宮沢賢治と音楽―『日本の子どもの文学』展によせて―」

国際子ども図書館は、東京都歴史文化財団東京文化会館と共催で、子どものための音楽会「宮沢賢治と音楽 ―『日本の子どもの文学』展によせて―」を開催します。このイベントは、「Music Weeks in TOKYO 2012　まちなかコンサート～芸術の秋、音楽さんぽ～」の一環で行うものです。入場は無料です。ぜひお越しください。

○日　時　10月14日（日）13：00～、15：00～（各回40分程度）
○会　場　国際子ども図書館ホール（3階）
○内　容　宮沢賢治にちなんで、ヴァイオリンとチェロで演奏します。
　　また、宮沢賢治や音楽に関連する児童書を紹介します。
※国際子ども図書館本のミュージアム（3階）で開催中の「日本の子どもの文学―国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」の児童文学者コーナーは、平成25年2月24日（日）まで「宮沢賢治」を特集しています。
○対　象　3歳以上の方　各回100名程度（先着順、事前申込みなし）
※子ども向けのイベントです。
○お問い合わせ先
国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課
電話　03（3827）2053（代表）

お知らせ

■『国際子ども図書館調査研究シリーズ』No.2を刊行しました



子どもの読書活動推進に取り組む方々の参考となるよう実施している調査研究プログラムの成果をまとめた『国際子ども図書館調査研究シリーズ』No.2を刊行しました。

今号のテーマは「図書館による授業支援サービスの可能性：小中学校社会科での3つの実践研究」です。平成22年度から23年度にかけて実施した「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」の実践記録及び考察を報告しています。

国際子ども図書館ホームページ上で全文をご覧になれます。

○国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）＞
＞子どもと本の情報・調査＞国際子ども図書館調査研究シリーズ
URL　http://www.kodomo.go.jp/info/series/index.html

■ 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

レファレンス　739号　A4　98頁　月刊　1,050円　発売　日本図書館協会

・年金改革をめぐる論点
・国家公務員の天下り根絶に向けた近年の取組（資料）
・政党リーダーの選び方（資料）

入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

本誌次号「関西館特集」のお知らせ

今年、京都府相楽郡精華町の地に関西館が誕生して10周年を迎えます。これを記念し、本誌619号（10月刊行）では関西館を特集します。

主な掲載予定記事は次のとおりです。

○関西館開館10年の概括

○関西館開館10周年記念展示会

このほか、定例記事のコーナーでも、関西館の部署や資料を採り上げて、関西館の活動をご紹介します。

同時に、『カレントアウェアネス』第313号（9月刊行）では、電子図書館事業・図書館協力事業・利用者サービス・アジア情報サービスについて、10年間の軌跡を振り返り、また今後の展望を示す記事を掲載します。

加えて、『びぶろす』58号（11月刊行）では、レファレンス協同データベース有効活用術、遠隔研修、アジア情報検索、デジタル化資料などについて記事を掲載します。

9月から11月にかけて、当館刊行物3誌で連続して取り上げ、多角的に関西館をご紹介します。ぜひ、本誌とあわせてご覧ください。

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.618 9 September 2012

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Sekai daiichi charine daikyokuba mawari sugoroku
Materials on the circus from the Eiryo Ashihara Collection

04 Travel writing on world libraries
Special Collections Reading Room in the Leiden University Library

15 The footprints of Japanese people moving overseas
Materials on Japanese emigrants in the Modern Japanese Political History Materials Room

24 "Mission and Objectives 2012-2016" formulated

14 <Tidbits of information on NDL>
Collecting materials on Japan

23 <Books not commercially available>
○*Nakano o kataru tatemonotachi : Nakanoku Taishoki Showa zenki kenzobutsu chosa hokokusho*

26 <NDL News>
○New Deputy Librarian
○2nd meeting of the Council on Organization of Science and Technology Information

27 <Announcements>
○*FY2011 progress report on the activities of the National Diet Library, Japan, based on the findings of the annual performance evaluation* published
○"Library Service and e-Strategy": International Symposium at the Kansai-kan commemorating the 10th anniversary
○"100 years of libraries in the Kansai Region and 10 years of the Kansai-kan": Exhibition at the Kansai-kan commemorating the 10th anniversary
○Concert for Children "Kenji Miyazawa and music" - on the occasion of the exhibition at the International Library of Children's Literature "Japanese children's literature"
○*ILCL Research Series No.2* published
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 田中久徳
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成24年9月号（No.618）
平成24年9月20日発行 定価525円
（本体500円）

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03（3523）0812（販売）
FAX 03（3523）0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

本田庄太郎画　『コドモノクニ』　第8巻 第4号　目次
昭和4（1929）年3月　東京社　26 cm.
「国立国会図書館デジタル化資料」でご覧になれます
（館内限定）

国立国会図書館月報

平成24年9月20日発行（毎月1回20日発行 9月号 通巻618号）

発売：社団法人 日本図書館協会　定価525円（本体500円）

雑誌 03919-09

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。